授業研究

歴史

主体的な社会参画に向けた資質を育成する授業の実践

－情報の意図を読み解く学習から－

神奈川県　横浜市立六角橋中学校　教諭　米津 一豊

1 はじめに

帝国書院の令和３年度版『社会科　中学生の歴史』（以下、教科書）には生徒たちの学びに役立つ多くの特色がある。その一つが多面的・多角的に日本の歴史を捉える視点を重視していることだ。例えば「人物コラム」やコラム「未来に向けて」では、為政者だけでなく様々な立場の人々を紹介することで多様な立場や異なる見方を学ぶことができる。また複数の意見や資料をもとに生徒の思考や対話を促す『多面的・多角的に考えてみよう』のコーナーなどを活用されている授業者の方も多いだろう。

こうした教科書の特色は主体的な社会参画の重要性を示すものである。『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編』では、第１章２(１)「②社会科の改訂の基本的な考え方」中の「(ｳ) 主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」という項目を挙げ、その中で「『公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと』は、中学校社会科学習の究極の目標」としてその重要性を示している。

2 社会科における「主体的に学習に取り組む態度」

さて、ここで中学校社会科における「主体的」という言葉について少し触れてみたい。

現行の学習指導要領について語る際のキーワードとなるのが「主体的に学習に取り組む態度」である（国立教育政策研究所教育課程研究センター編『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　中学校　社会』(令和２年３月)。[本誌2022年度前期号p.20を参照] これを土台に私を含めて多くの先生方が授業ごとや単元ごとの生徒の取り組みや振り返りを通して、「主体的に学習に取り組む態度」の評価資料の収集を行っていることと思う。

一方で、同書p.37「２ 単元の評価規準の作成のポイント」の「(１) 単元における各観点の評価規準作成の留意事項」の「③『主体的に学習に取り組む態度』の観点の評価規準作成に当たっての留意事項」では、「現実の社会的事象を扱うことのできる社会科ならではの『主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成』(中略)が必要である」として、前述の学習指導要領の「改訂の基本的な考え方」を示している。

このように、中学校社会科における「主体的に学習に取り組む態度」は、生徒の粘り強い取組や学習調整的な面に加えて、「よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究、解決しようとする態度」といった生徒たちの主体的な社会参画に向けた資質を育成していく側面があるともとらえられよう。

3 近代（後半）を扱うにあたって

さて、この主体的な社会参画に向けた意識は、現代に直結する近代後半の単元を扱う際に特に重要なものとなってくる。新型コロナウイルス感染症やロシアによるウクライナへの侵攻に関

～社会科の視点で読み解く「最後の授業」～

疑問

フランスの支配が終わり、ドイツの支配下に入ることを悲しんでいる主人公のフランツ少年。
彼が、フランス語を「やっと書ける程度」に過ぎないのはなぜか？資料をもとに考えてみよう。

資料①　アルザス地方の略年表

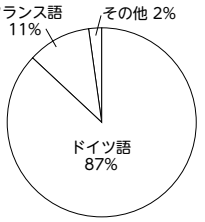
紀元前	ローマ帝国により支配される
1 世紀	
2 世紀	
3 世紀	
4 世紀	ゲルマン系民族が流入する
5 世紀	フランク王国（フランス・イタリア・ドイツの母体）の領土になる
6 世紀	
7 世紀	
8 世紀	
9 世紀	フランク王国が分裂しフランス・イタリア・ドイツの原型ができる
10 世紀	神聖ローマ帝国（のちのドイツ）の一部となる
17 世紀	三十年戦争の結果、フランス領となる
18 世紀	
19 世紀	普仏戦争の結果、ドイツ領となる
20 世紀	第一次世界大戦後、フランス領となる
	第二次世界大戦がはじまり、ドイツが占領する
	第二次世界大戦がおわり、フランス領となる

資料②　アルザス語とドイツ語・フランス語の比較

	アルザス語（南部アルザス語）	ドイツ語	フランス語
学校	Schüel	Schule	école
ワイン	Wi	Wein	vin

参考文献
柴崎 隆「〔南部〕アルザス・ドイツ語の文法記述へのアプローチ
―ミュルーズ・アルザス語方言に基づいて」
『金城学院大学論集　人文科学編』第8巻第2号 2012年

資料③　アルザス地方の住民の使用言語（1910 年調査）



『万有百科事典 世界歴史９』より作成

資料①～③から、フランツ少年が、フランス語を「やっと書ける程度」に過ぎないのは、

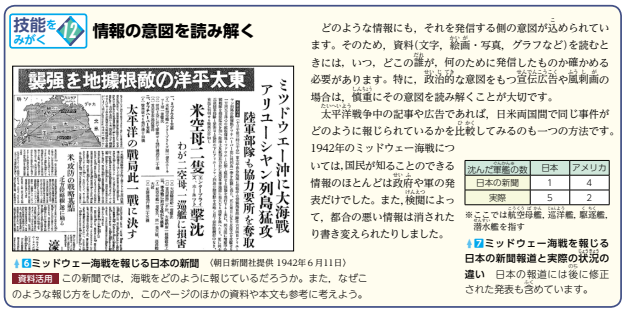
からだと考えられる

もう一度、「戦争のおそろしさ」について、以下の点を意識しながら考えてみよう。

・作者アルフォンソ・ドーデは、小説『最後の授業』をどのような目的で書いたのだろう。
・小説『最後の授業』はどのような役割を果たしたのだろう。

図２　ワークシート

する報道や、SNS等で根拠の不確かな情報が飛び交う昨今の状況を見ても、私たち一人一人の主体性や、できごとを多面的・多角的に捉える力がこれまで以上に問われていると感じる。教科書においても複数の立場からの視点や様々な資料を示して、多面的・多角的なとらえ方ができる工夫がなされている（図１）。


技能をみがく 12　情報の意図を読み解く

どのような情報にも、それを発信する側の意図が込められています。そのため、資料（文字、絵画・写真、グラフなど）を読むときには、いつ、どこの誰が、何のために発信したものか確かめる必要があります。特に、政治的な意図をもつ宣伝広告や風刺画の場合は、慎重にその意図を読み解くことが大切です。

太平洋戦争中の記事や広告であれば、日米両国間で同じ事件がどのように報じられているかを比較してみるのも一つの方法です。1942年のミッドウェー海戦については、国民が知ることのできる情報のほとんどは政府や軍の発表だけでした。また、検閲によって、都合の悪い情報は消されたり書き変えられたりしました。

沈んだ軍艦の数	日本	アメリカ
日本の新聞	1	4
実際	5	2

※ここでは航空母艦、巡洋艦、潜水艦を指す

6 ミッドウェー海戦を報じる日本の新聞（朝日新聞社提供 1942年６月11日）

資料活用　この新聞では、海戦をどのように報じているだろうか。また、なぜこのような報じ方をしたのか、このページのほかの資料や本文も参考に考えよう。

7 ミッドウェー海戦を報じる日本の新聞報道と実際の状況の違い　日本の報道には後に修正された発表も含めています。

図１　『社会科 中学生の歴史』p.249　技能をみがく12

こうした資料からは、政府が意図をもった情報によって国民を統制しようとしたという側面とともに、国民自身も時代の雰囲気に流され、ともすれば時代の雰囲気を無意識に醸成していく側面を読み取ることができる。これは現代にも起こりうる現象であり、これからの社会を担う生徒たちには、安易に情報や雰囲気に流されず、社会的事象を多面的・多角的に考察する力を育てる必要性がある。しかし、生徒たちの反応をみると、その多くはこうした出来事をあくまでも過去のこととしてとらえており、現在でも起こりうること、自分ごととしてとらえることは難しい。そこで今回は一編の短編小説『最後の授業』を通して生徒たちに“情報に操作される”体験をあえてさせることでその意識を揺さぶり、周囲の空気に安易に流されず社会的事象を多面的・多角的に考察する重要性を意識させる授業を行おうと試みた。実際の授業においては第２部第５章「二度の世界大戦と日本」のまとめとして、２単位時間を設定し、２時間の授業を通して、生徒の思考力・判断力・表現力と主体的に学習に取り組む態度の変容を見とる。具体的には『最後の授業』のみを読んで考える１時間目と、背景資料をもとに『最後の授業』の内容を再検討する２時間目に作成するワークシート（図２）を通して、思考を具体的に表現できているか、歴史的事実について資料に基づき多面的にとらえることができるようになったかを評価することとした。

4　授業の展開と評価

フランス人作家ドーデによる短編小説『最後の授業』は、1872年にフランスの新聞『レヴェヌマン』紙上で発表された。かつて日本の国語の教科書の教材として採用されたこともあるこの作品は優れた文学性をもちつつも、「発信す

図３　『中学校社会科地図』「①ヨーロッパ中央部」p.47～48（部分）

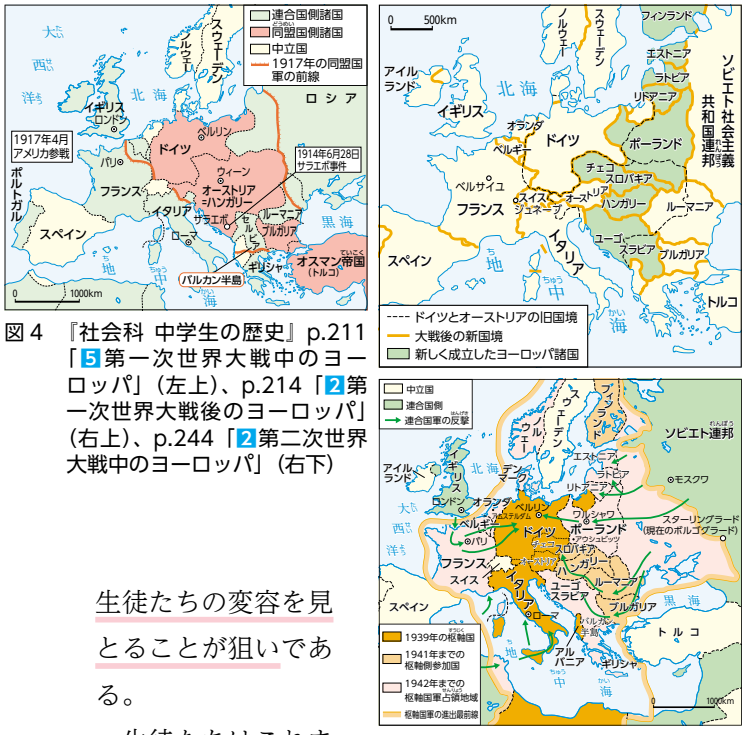


図４　『社会科 中学生の歴史』p.211「5第一次世界大戦中のヨーロッパ」（左上）、p.214「2第一次世界大戦後のヨーロッパ」（右上）、p.244「2第二次世界大戦中のヨーロッパ」（右下）

る側の意図」が隠された小説である。一応のあらすじを紹介するが、翻訳版が容易に入手できるのでご一読をお勧めする（『月曜物語』所収）。

> 主人公はフランス領アルザス地方に住むフランツ少年。彼がいつものように遅刻して学校に行くと教室の雰囲気が違う。普段は厳しいアメル先生がなぜか優しいばかりでなく、村の大人たちまで教室に集まっている。アメル先生が言う。「私が授業をするのは今日が最後です。アルザスとロレーヌの学校ではドイツ語しか教えてはいけないという命令がベルリンから来ました」。フランスがドイツとの戦争に負けてしまったため、これからはフランス語ではなくドイツ語を使わなくてはならない。「ぼくときたら、やっとフランス語を書ける程度なのに！」とフランツ少年はこれまで勉強を疎かにしてきたことを後悔しつつ、最後の授業に臨む。アメル先生は「一つの国民が奴隷となっても、その国民が自分の言語を持っている限りは牢獄の鍵を持っているのと同じだ」と語り、最後のフランス語の授業を行う。授業の終わりに「Vive La France!（フランスばんざい！）」と黒板に書き、子どもたちに別れを告げる。

いうまでもなく、ドイツ・フランス間で幾度も領有権が移動してきたアルザス・ロレーヌ地方を舞台にした小説である。時代は普仏戦争（1870～1871）の直後。フランスの敗戦によりアルザス・ロレーヌ地方がドイツへ割譲されることが決められた。ドーデがこの小説を発表したのが1872年なので、当時としてみれば現在進行形の題材を用いた小説といえるだろう。

まずは１時間目の冒頭に、これまでの学習の振り返りとともに次のような**主発問「戦争のおそろしさとは何だろうか」**を投げかける。

社会科というよりも道徳のようだが、今回の授業ではこの発問を繰り返し提示することで、生徒たちの変容を見とることが狙いである。

生徒たちはこれまでの学習内容を念頭に、空襲や原爆の被害の恐ろしさ、旧日本軍のアジアでの占領政策などを挙げていく。

そこで第一の資料として『最後の授業』を通読する。その後、小説の内容に対しての問いとして生徒たちに再び主発問を投げかける。生徒たちは、「戦火による犠牲だけではなく、平和に暮らしている人々の心まで傷つけてしまう」「教育や文化も戦争によって破壊される」といった考えを発表する。中にはロシアによるウクライナへの侵攻以降、都市名の表記が変更になったことに触れ、言語のもつ政治的な意味に着目した生徒もいた。こうした内容をワークシートに記入させ、次回もこの続きを行うことを告げ授業を終える。

２時間目の授業では、追加の資料をもとに『最後の授業』を別の側面から読み解いていく。

まずは、『中学校社会科地図帳』（以下、地図帳）p.47～48（**図３**）で物語の舞台となるアルザス地方の位置と、現在はフランス領となっていることを確認する。生徒たちはこの地域がドイツとフランスの国境付近であること、また、教科書p.211、214、244（**図４**）の地図からは、ドイツ、フランス間で領有権が移り変わっていたことに気づく。中には小説の内容を想起して「フランスに戻ることができてよかった」と感想をつぶやく生徒もいた。

図５　『中学校社会科地図』p.52「⑤鉱工業」

産業の特色について問いかけると、生徒は地図帳p.52の資料図（**図５**）から、ここは鉱工業の盛んな地域で、現在は原油パイプラインが通っていることも理解する。教師からは、この地域は石炭や鉄鉱などの資源が豊富で、ライン川の水運を利用した交易も古くから盛んだったこと、４世紀からゲルマン系民族の土地となりその言語圏に、17世紀半ばにフランス語圏になり、19世紀半ばから公用語が４回変わっていることを説明する。このようにこの地域はラテン系・ゲルマン系両民族にとって歴史上、地理的・政治的に、ヨーロッパの重要な場所であり続けてきたことを補足すると、なぜドイツとフランスとで領有を争い、何度も公用語が変わることになったのかの理解が促されるだろう。

ここでワークシートを配布し、小説の主人公のフランツ少年が、フランス語を「やっと書ける程度」に過ぎないのはなぜか？という追加の発問を投げかける。生徒たちはワークシートに示された資料をもとに、小説『最後の授業』に隠された意図に迫っていく。これらの資料を用いることで、物語の舞台となったアルザス地方が、歴史的・文化的にはフランスよりもむしろドイツ側に近い地域であることを読み取ることができる。そこから、著者のドーデはあくまでもフランス側の立場に立ってこの物語を著したことを推測することができる。

今回は紙のワークシートを用いたグループワークを行い、生徒と資料との対話、そして生徒同士の対話を促す形式をとったが、生徒たちの実態に合わせて、個人でワークシートに取り組む方法や、生徒同士の対話を促すツールとしてChromebookのGoogle Jamboardを用いる方法も考えられる。

生徒がある程度『最後の授業』の意図（フランス人としての愛国心を高める）に気が付いたところで、もう一度主発問である「**戦争のおそろしさとは何だろうか**」と問う。生徒たちは「歴史が都合よく書き換えられてしまう」「考え方や社会全体の雰囲気がコントロールされてしまう」「感動的な物語を通して情報に操作される」などの考えが出された。また、「今も自分たちの周りに同じようなことがあるかもしれない」「すぐに信じず、情報の根拠を調べることが大切」と、学習内容を自分事としてとらえなおす様子も見られた。中には地図帳p.50のヨーロッパ州の言語分布地図で、アルザス地方がラテン系言語圏に色分けされていることに着目して、現在のアルザス地方やその言語についてさらに資料を集めてみたいという生徒もいた。

5 おわりに

本授業実践例では、学習指導要領に基づき、地理的分野と公民的分野との関連を意識して行った。また、生徒自身が情報の意図を読み解くことによって、主体的な社会参画への手法をより具体的に学ぶことができ、歴史的事象を多面的・多角的に検証する経験ができたといえるだろう。

今回は小説を教材としたが、教科書を含め、より適切な資料や題材を活用して、学習指導要領の各分野の目標である「広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力」の育成につながるよりよい授業づくりに向けて、教材との対話を続けていきたい。

帝国書院のウェブサイトに、
本授業研究のワークシートを掲載いたします。